学校感染症について（資料）

大阪府立成城高等学校 定時制の課程 保健室

学校感染症は、学校における保健管理の特異性を考慮し、特に留意する必要がある事項については学校保健安全法（旧学校保健法）ならびに同施行規則で必要な事項を定めるとして規定されました。

学校感染症には第一種から第三種まであり、第一種は感染症予防法第 6 条に規定する一類並びに二類感染症です。第二種は飛沫感染するもので、児童生徒等の罹患が多く、学校における流行を広げる可能性が高いものです。

ちなみに感染症予防法で規定されている一類から四類までの感染症は発生した場合、医療機関は直ちに国へ届け出なければなりません。

第三種は学校教育活動を通じ、学校において流行を広げる可能性のある感染症です。

「その他の感染症」については、学校で流行が起こった場合にその流行を防ぐため、必要であれば校長が学校医の意見を聞き、第三種の感染症として措置できる疾患です。

「その他の感染症」で出席停止の指示をするかどうかは、感染症の種類や地域・学校における発生、流行の状態等を考慮して判断する必要があります。これは隣接する学校・校種・地域によって取り扱いが異なる可能性があるため注意を要します。また、学校感染症に罹患し、治癒して再登校する場合、「治癒証明書」の提出を義務付けています。

出席停止と臨時休業は、学校感染症のまん延防止対策として行われるものです。

出席停止は、学校保健安全法第 19 条で「校長は感染症にかかっており、かかっている疑いがあり又はかかるおそれのある児童生徒等があるときは、政令で定めるところにより、出席を停止させることができる」と定めています。臨時休業については、同法第 20 条で、「学校の設置者は、感染症予防上必要があるときは、臨時に、学校の全部又は一部の休業を行うことができる」とし、その詳細については、文部科学省令に定められています。（法第 14 条）

○第一種 第一種の感染症にかかった者については、治癒するまで（規則第 19 条第 1 号）

○第二種 それぞれ定められた出席停止期間。ただし、病状により、学校医その他の医師において感染の恐れがないと認めるときはその限りではない。（規則第 19 条第 2 号）

○第三種及び結核 病状により学校医その他の医師において感染のおそれがないと認めるまで（規則第 19 条第 3 号）

○その他のものについての出席停止期間

第一種若しくは第二種の感染症患者のある家に居住する者又はこれらの感染症にかかっている疑いがある者については、予防処置の施行の状況その他の事情により学校医その他の医師において感染のおそれがないと認めるまで（規則第 19 条第 4 号）

第一種又は第二種の感染症が発生した地域から通学する者については、その発生状況により必要と認めるとき、学校医の意見を聞いて適当と認める期間（規則第 19 条第 5 号）

第一種又は第二種の感染症の流行地を旅行した者については、その状況により必要と認めるとき、学校医の意見を聞いて適当と認める期間（規則第 19 条第 6 号）

分類	病名	出席停止の基準
第1種	※1	治癒するまで
第2種	インフルエンザ 百日咳 麻疹（はしか） 流行性耳下腺炎（おたふくかぜ） 風しん 水痘（みずぼうそう） 咽頭結膜熱 結核 髄膜炎菌性髄膜炎	発症後5日、かつ、解熱後2日（幼児3日）が経過するまで 特有の咳が消失するまで、または、5日間の適正な抗菌剤による治療が終了するまで 解熱した後3日を経過するまで 耳下腺、顎下腺または舌下腺の腫脹が発現した後5日間を経過し、かつ、全身状態が良好となるまで 発疹が消失するまで すべての発疹が痂皮化するまで 主要症状が消失した後2日を経過するまで 症状により学校医その他の医師が感染の恐れがないと認めるまで 症状により学校医その他の医師が感染の恐れがないと認めるまで
第3種	コレラ 細菌性赤痢 腸管出血性大腸菌感染症 腸チフス パラチフス 流行性角結膜炎 急性出血性結膜炎	症状により学校医その他の医師が感染の恐れがないと認めるまで
その 他 の 感 染 症 例	溶連菌感染症	溶連菌感染症適正な抗菌剤治療開始後24時間を経て全身状態が良ければ登校可能
	ウィルス性肝炎	ウィルス性肝炎A型・E型：肝機能正常化後登校可能 B型・C型：出席停止不要
	手足口病	手足口病発熱や喉頭・口腔の水疱・潰瘍を伴う急性期は出席停止、治癒期は全身状態が改善すれば登校可
	伝染性紅斑発疹（リンゴ病）	伝染性紅斑発疹（リンゴ病）のみで全身状態が良ければ登校可能
	ヘルパンギーナ	ヘルパンギーナ発熱や喉頭・口腔の水疱・潰瘍を伴う急性期は出席停止、治癒期は全身状態が改善すれば登校可
※2 参 照	マイコプラズマ感染症 感染性胃腸炎 （流行性嘔吐下痢症等）	マイコプラズマ感染症急性期は出席停止、全身状態が良ければ登校可能 下痢・嘔吐症状が軽快し、全身状態が改善されれば登校可能 * 感染性胃腸炎については、必ずしも出席停止とは限らない
	アタマジラミ 伝染性軟属腫（水いぼ） 伝染性膿痂疹（とびひ）	出席可能（タオル、櫛、ブラシの共用は避ける） 出席可能（多発発疹者はプールでのビート板の共用は避ける） 出席可能（プール、入浴は避ける）

※1：第1種学校感染症：エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、痘そう、南米出血熱、バスト、マールブルグ熱、ラッサ熱、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群（SARS）、急性灰白髄炎（ポリオ）、鳥インフルエンザ（H5N1）

※2：「その他の感染症」で出席停止の指示をするかどうかは、感染症の種類や地域・学校における発生、流行の状態等を考慮して学校長並びに学校医等により判断します。これは隣接する学校・校種・地域によって取り扱いが異なる可能性があるため、ご不明の点等があれば本校保健室までお問い合わせください。